
環境の移りゆく物語 2 ヒローズ

魚影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

環境の移りゆく物語 2 ヒローズ

【著者名】

NZマーク

【作者名】
魚影

【あらすじ】

環境が移りゆく物語 を主軸にしたサイドストーリーのようのうなものです。反応によつては連載?するかもしれません。
・・詰め込みすぎたかな。

再会の日だ。

いつもも増して日差しは強く、蝉たちの命の叫びですら僕の耳には煩わしく感じてしまうような、そんな倦怠感。

それでも、これから予定を思うだけで自然と足取りは軽くなるし、この暑さも気にならなくなるというものだ。

今日も、全国的に夏休みだつた。

こんな猛暑の中外をうろつく者は当然少なく、いたとしても精々買い物をしに来た主婦が大半。

そんな中、商店街の中一人佇む少年がふと吐息を漏らす。

僕だ。

高校1年生の夏休み、部活が無い人間は必然的に暇なこの時期に、僕はその暇を潰そうともせざだらだら過ごし自由人を極めている訳だが、そんな味気ない夏休みにもやつぱり少しの予定は入つてゐる。今日がその日。

中学時代の友人と再会する。

諸一般的に考えれば高校生としてよくあるような出来事で、それほど心待ちにするような行事で無いと言えるが、僕らの場合はちょっと違つ。

僕ら四人は、家庭の事情で現在バラバラの場所にいる。

僕の祖父は中学卒業の直後に亡くなつて、僕をその財産と地位の繼承人と定めた。よつて僕はバカみたいな話だが、この年でとある私立高校の校長をやつてゐる。といつても形式上だけで管理は他の教師がやつてくれているが。

泰章という一人の友人は父親が失踪しそのせいで母親が精神病棟に入つてしまい、今は妹と一緒に一人暮らしを強いられてゐる。

貴正は親の再婚で家に居づらくなつて遠く離れた別荘に住んでいるし、亜貴は元々両親が服役中で施設にいたのだが、義務教育期間が終わつたので自立しなければならず彼も遠く離れた土地に住んでいる。

狙い澄ましたかのような悲劇。

もう離れ離れになつてから四ヶ月たつのでこの状況に慣れつつあるが、それでも心の隅で違和感がまだ蔓延つている。

まあ、今更こんなことを考えていても仕方がないか。僕が今日を向けるべきはもう会えないかも知れないと思つていた彼らとの再会のことで、辛い過去のことではない。

不安な要因は自分たちの行く末とかじやなく、もつと単純なこと。昔どおりに接することが出来るかどうか、だ。

自分で言つのもなんだが、僕は中学時代から見てかなり変わつてしまつている。

高校では一部の人以外僕には終止敬語で話すし、僕も立場上大人びた立ち振る舞いをしなくてはならない。

本当はもっとフレンドリーに接したいのに、ただでさえ異例な高校生校長。多数の生徒が僕のことを疎ましく思つているのは明白だから。

「あ～～、昔みたいな話し方出来るかなあ～」

正直、すごく不安です。

X X X X

「ゅううやあああ！！」

不意に僕を呼ぶ声がした。

午後1時47分、約束の時間まであと13分。一人目の友人が来たようだ。

「泰章！ ひさしぶ……」

僕は後方から聞こえたその声に応じるため振り返り……固まる。

「おい！ すいぶんと早く来たな雄哉。ていうか久しぶり～。元気だつたか？ 僕は元氣があー……って、どうした？ 雄哉…………・うお」

雄哉というのは僕の名前だ。でもそんなことを言っている場合ではないことを察してもらいたい。現在進行形で僕の目に映る泰章の右肩から鮮血が迸っているこの状況においては。

「ぐ……ううあ

「フフッ、セントラルの第一部隊長も、平穏な街で背後をとつてしまえばこんなものか……はっはっは！」

呻く泰章と、血に濡れた刃を持ちながら高笑いする黒衣の男。

ああ、会話如きで不安がつてた僕が馬鹿みたいじゃないか。

でも流石に旧友が少し見ない内に、道端で唐突に悪の秘密組織からの刺客によつて肩を切られるようになつてるなんて、想定できないだろう？

男は当惑しきつてる僕を見て嘲り笑う。逃げるべきなのか……

・・・

だが、その笑い声も不意に止み、その瞬間一陣の風が吹き抜ける。

……この後の描寫は、残念ながら僕の目では追えなかつたため結果だけいうと、翼を生やした泰章が黒い塵をつくつた。

「俺たちを甘く見るなよ、アクネス」

塵を睨みつけながらぼそつと呟く泰章。

ちよつと、僕ら一般人には知り得ない戦いがあつたようだ・・・・・・

うん。こつちの世界には足を踏み入れないよつこじよつ。

その後、間もなくして貴正が到着した。

異質な世界を見てかなり驚いていたし、泰章には秘密にしといてくれの一点張りでほとんど言及出来ず、不安たらたらだつた僕にとって彼の到着はとても嬉しいもののハズだった。……が。

「貴正。その子達は……何だ？」

「いやワリィ。ほんとどうしてもついて来たいつて言つから……」

彼はリア充だった。

訂正しよう。リア充でもここまで奴はいない。言つならば、魔王。

女の子4人を侍らしながらやつてきた男、貴正。

地域住民の妬みと羨望に全く気付いていないようになへラへラ笑つている魔王、貴正。

……ラブコメの主人公、貴正。

しかも、その女の子たちの髪や眼が、まるでアマゾンの奥地で適応していつたかのようなありえない色してるし。

貴正に聞いてみると、彼女らは宇宙人で、ある日突然貴正宅へ降り立つた・・・・・らしい。へーそーですか。

今氣付いた。

変わつてるのはなにも僕だけなんかじゃないと。

彼らもまた、急激に変化した周囲に同化し、一般の目から見ると異質に変化しているのだ。

決して彼らの意志ではない。ただそれが運命だった、と諦め氣味に受け入れるしかないだろう。僕も同じように生きているのだから。

そんな僕の推察を裏切らず、遅れて亜貴も登場した。

「P-1！ 何をしている！ 背後から回りながらC7C8の援護をしろ！ 射出角度は75度、想定敵3のリニアキャノン発射と同時にバレルめがけて撃ち込め！ ああすまないこちらも予定地区に着いたので通信を切る。……やあ皆、遅れてごめん」

確実にどこかの組織の司令官をやつてるのだろうと気付いたね。
だって、普通の高校生はインカムを付けながら英語で武器の発射
タイミングを指示はしない。

・・・・・ 結局僕以外全員、世にも奇妙な世界の住民つてわけ
だ。

取り巻く環境が変わつても、人の本質は変化しない。

集合した後一緒に入つたファミレス、四人で話す取り留めのない

くだらない話。笑顔、悩んでる暇がないくらい、楽しい時間。

これが、僕らの積み重ねてきた時間が作る温かさなのかもしれません
い。

出会い、別れ、再会。

確かに僕らは今互いに異なる道を進んでいる。

人生という名の僕らの道が交わっていたのは既に過去の事。

でも、生きている限り僕らの絆、交わっていた日々が消えてしまつ
事は無いんだと思えた。

そう思える僕は自分の環境を恨まない。

境遇か運命か、僕らには乗り越えなくてはならない山が沢山ある。
だけど、きっと出来る。

環境に支配されつつも、また自分からその環境を支配しようとする。

不毛なおいかけっこだが、それもまた人生。楽しもう。

友情・努力・勝利

少し分かつた。諦めじやなくて、それに僕は勝とうとしている。
さながら、主人公のよう。

「そりゃ、雄哉。お前なんか身の回りでおかしな事とかないの
？」

唐突に泰章が僕に尋ねる。

「えつ？……校長になつたこと以外には特に……。ああ、しいて言え、ば明日うちの学校の生徒会長に呼ばれてるんだけど、あの人先週大怪我したんだよ。なのに理由も言わないし……どうしたのかな？後は、その時会長が眼帯した女の子を転入生として連れてきた事……くらいかな？」

あまり質問の意図が分からなかつたけど、思い出したこと答える。「やっぱり、お前にも来るみたいだな」

「明日が楽しみだな、雄哉」

僕がそう話すと、皆は妙に納得した様子で口々に言う。

明日から始まる、と。

「何が……始まるの？」

「ちょっと不思議な体験だよ。例えばラノベの主人公のようにな」

(後書き)

やつぱり置めてませんね。善処します。
感想とか下さると連載意欲が湧きます。
諸事情により消えるケースがあるので了承を。では。
- T s h i
e i

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6523m/>

環境の移りゆく物語2 ヒローズ

2010年10月17日03時31分発行